

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007-2008
 課題番号：19520675
 研究課題名（和文） 奈良盆地およびその周辺域の景観と環境の保全に関する基礎的研究
 研究課題名（英文） Fundamental study on the conservation of landscape and environment in and around the Nara Basin, western Japan.
 研究代表者
 松本 博之（MATSUMOTO HIROYUKI）
 奈良女子大学・文学部・教授
 研究者番号：70116979

研究成果の概要：

本研究では、奈良盆地とその周辺域における景観・環境保全の実態と変遷過程について、特に第二次世界大戦後を中心に検討した。奈良盆地とその周縁部では、高度成長期以降の 1980 年代末まで里山的な林地や、水田を中心とする耕地の減少が目立った。1980 年代前半は、既存市街地に近い地域の減少が中心であったが、1980 年代後半には、それが周縁部に広がり、耕地というよりは林地の減少が目立つようになり、1990 年代に入ると、林地や耕地の減少は、かなり鈍化した。このような変化と軌を一にして、地域住民とため池や河川・水路などの水辺空間や、その他の文化的景観との関係性も大きな変容を遂げてきたことが明らかとなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：景観保全、環境保全、里山、歴史的建造物、地域貢献、奈良盆地

1. 研究開始当初の背景

景観および環境の保全の問題は学術的な意味でも応用的な側面でも新たな段階に入っている。応用的な側面をみると、平成 17 年に施行された文化財保護法の改正による通称「文化景観法」は「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成され、我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことができないもの」を保全対象とすべき景観地と定義し、地域環境の整備に関し

て新たな一歩を踏み出した。景観保全と地域環境整備は、今後、社会的要請として、ますます求められるテーマとなるであろう。しかしながら、環境論、景観論をディシプリンの柱としてきた地理学が、そのような要請にどこまで応えられるかという問題については、疑問がないわけではない。とくに、わが国の地理学にあっては、第二次大戦後、自然地理学と人文地理学との分化に伴い、双方に密接なつながりを持つ環境論を等閑視してきた

ことは否めない事実である。

一方、欧米の地理学の潮流をみると、ディシプリンとしての地理学における自然と人文の二元性が問い直され^{a)}、ANT理論 (Actant Network Theory) や非表象論 (non-representative theory) を核としながら、そのフロンティアを模索している。例えば、“Handbook of Cultural Geography” では ‘Culturenature’ というセクションが設定されたり^{b)}、“Cultural Geography”^{c)} に関するリーディングスにおいても 10 篇の論文の中で、人間－環境系 (man-environment system) が議論されている。それらの議論では、人間はある特定の場所や空間において環境を一方向的にコントロールしているのではなく、環境構成要素の側から人間に働きかける相互作用も働いている、という見方が強くなって来ている。1980年代からの文化論的展開 (Cultural Turn) 以後、文化地理学はその研究対象を人間による想像力や表象に力点を移してきた。その結果、社会的構築主義 (social constructivism) やコスグローブらの景観論^{d)}に見られるように、社会過程にのみ注目し、自然的・人工的環境構成要素は人間の側から一方的に意味づけされるものとして捉えられてきた。しかし、今また、日常生活における景観と環境の物質性 (materiality) の持つ意味が改めて問い直されているのである。こうした研究動向の現状については、わが国の地理学では野中^{e)}が、部分的に示唆しているに過ぎず、とくに隣接科学との境界領域にある環境論や景観論の議論に対して地理学の側から情報発信するためには、物質性を重視した新たな展望を拓き、深める必要がある。

研究代表者は 1989 年に文化地理学の環境論に関するレビュー^{f)}を手がけて以来、人間－環境系に関心を持ち続けてきた。なかでも、日常生活における住民の自然環境認識^{g)}や環境利用にともなう海洋資源管理の問題^{h)}、さらには近代都市環境下の日常生活における身体性 (sensitivity) との関係ⁱ⁾などに焦点を当てた研究を進めてきた。この過程で、人間が日常生活の実践活動において関わる環境構成要素の意味は、社会構築主義にみられる主張のような、人間の側からの意味づけや価値づけにのみに解消しえず、人間の身体性を媒介としながら、自然的・人工的環境構成要素の側からの働きかけが無視できないことに気づくようになった。そこでまず、平成 16～18 年の科学研究費補助金による「奈良盆地における景観の再評価に関する基礎的研究」で、自然景観や人文景観の個別要素の特徴を通時的に明らかにする目的で、時代間の比較や発達史的な検討を加えた。そしてそれら個別景観の特徴・実態をかなり解明させた。しかしながらこの研究では、検討要因

が複雑で多岐にわたり、自然的・人工的環境構成要素の側からの働きかけの解明などを十分行うまでには至らなかった。そこで本研究では、景観研究の基盤に立ちながら、新たに、景観・環境の保全とその物質性という観点を加えつつ、それを社会過程 (social process) に組み込むことによって、より動態的な検討を目指すことにした。景観や環境の保全は、「文化財保護法で保護すべき自然的・文化的景観の選定」といった社会的要請に資するにとどまらず、それらを 1 つの社会過程として組み込み、人と環境構成要素との相互関係性を究明し、地域の多様性を研究する地理学の根幹に資する研究テーマと捉えている。

2. 研究の目的

本研究では、景観・環境の保護と保全を、異なる概念として用いる。“保護 (protection)” は人間の手を一切加えず、サンクチュアリとして囲い込み、保持する立場である。これに対し“保全 (conservation)” は、人の手を加えながら、とくに在地の人々や外部者が日々の生活を通して関わりながらその在り様を持続していく立場、あるいはより良い状況を生み出していく立場である。景観や環境を保持していく場合、どちらか一方であればよいというわけでない。より望ましい形式は人の生活の中に繰り込まれながら、同時により良き景観と環境を作り出していくことである。社会過程の中にある景観や環境を動的に捉えるならば、ダイナミックな後者の観点がより重要である。以上のような諸点を踏まえ、本研究では、奈良盆地とその周辺域を対象として、次の 3 つの事項について明らかにしたい。

(1) 盆地周縁部の里山や盆地内部の里川・ため池・屋敷森がどのような現況におかれ、住民生活とどのような関わり方をしているのかを明らかにする。

(2) 文化財の多い奈良市を中心として、歴史的景観の保全と経済活動との共存の可能性を探る。

(3) 盆地内部の都市住民の日常生活が、景観や環境とどのように絡み合い、どのような役割を果たし、持続性や保全の観点から今後どのような役割を果たしうるのかを明らかにする。

3. 研究の方法

まず、前述の (1)～(3) と関係する諸事象について、基礎資料の収集と、一部、それを基にした分布図の作成を試みた。具体的には、

1) 奈良盆地及び周辺地域の里山・里川・ため池・屋敷森などの改変の過程を復原する。その素材として複数年次にわたる空中写真

及び地形図を収集して、住宅、工場、商業施設、道路建設に伴った里山・里川・ため池・屋敷森の改廃の状況と植生をはじめとした周辺域の土地利用状況の変化を基礎資料化する。

2) 都市部及びその周辺における土地利用の変遷、とくに都市再開発に伴った都市建造環境の変化と考古学的遺跡や文化財を中心とした歴史的建造物の立地及び改廃状況に関わる基礎資料を収集し、文化景観及び環境構成の変遷に関して検討する。

3) 旧市街地の町内会に今日も根付いている地蔵講をはじめ、春日講などの民俗行事、及び近年創出されたイベントについて、関連する地域やその組織体制に関する基礎資料の収集を行う。また、地域住民の日常生活に組み込まれた空間構成に関わる基礎資料を収集し、認知環境について検討する。

4. 研究成果

奈良盆地中部～北西部とその周辺域を事例として、土地利用の経年変化を見ると、高度成長期以降の1980年代末まで里山的な林地や、水田を中心とする耕地の減少が目立った(図1;1974年と1996年の2例のみ掲載)。1980年代前半は、既存市街地に近い地域の減少が中心であったが、1980年代後半には、それが周縁部に広がり、耕地というよりは林地の減少が目立つようになり、1990年代に入ると、林地や耕地の減少は、かなり鈍化した。

さらに、上記のような変化と軌を一にして、地域住民とため池や河川・水路などの水辺空間や、その他の文化的景観との関係性も大きな変容を遂げてきたことが明らかとなった。たとえば、奈良市街地を流れる率川(いさかわ)の流路周辺では、1960年頃から、ため池の改変や埋め立て、あるいは率川流路の暗渠化などが進み始めることとなり、それを契機に、地域住民と水辺空間との関係性が希薄になってゆくことを読み取ることができる(図2)。このような流路の暗渠化は、平成に入ってからも続いているが、近年では、親水空間の再生を目指した新しい取り組みも実施されるようになってきている。しかし一方では、このような取り組みが地域住民にどのような形で受け入れられているかの実態を見る限り、一度失われた親水空間の再生がいかに大変であるかを再認識することともなった。そして、人々が持つ景観や環境に対する意識は、現に存在する物質的な特性に根差すとともに、長い年月を掛けて醸成されてきた歴史的な産物でもあることが示唆された。

以上のようないわゆる戦後の高度成長期を中心とする景観・環境の変化には、さまざまな文化景観の変化も含まれている。その中

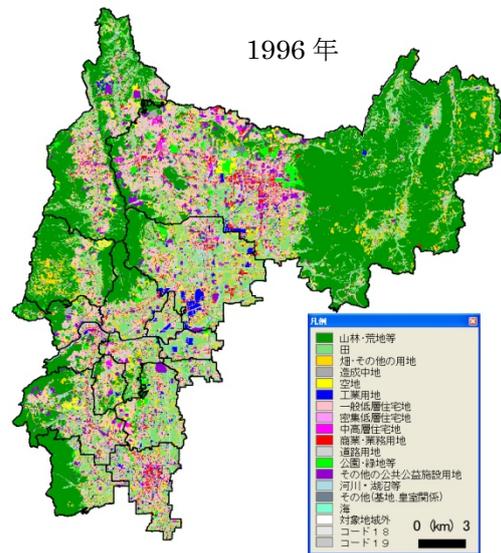
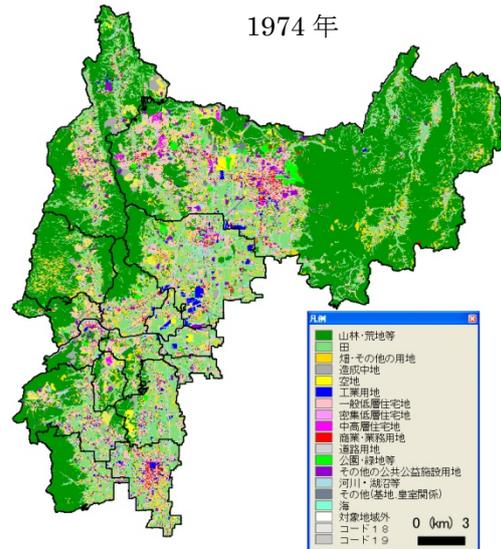


図1 奈良盆地中部～北西部およびその周辺域における土地利用(上:1974年、下:1996年、国土交通省国土地理院「細密数値情報10mメッシュ土地利用」より作成)

行政区画は、1996年時点の次の旧市町村名に対応。奈良市、大和高田市、大和郡山市、生駒市、香芝市、平群町、三郷町、斑鳩町、安堵町、川西町、三宅町、當麻町、上牧町、王寺町、広稜町、河合町。

には、歴史の長い奈良の地でも、戦後という限られた時代の中で出現し、現在、それが早くも痕跡を失いつつあるものが少なからず存在することを指摘できる。たとえば、神社仏閣などの古い歴史的景観とは無関係な行楽・観光施設の中に、奈良ドリームランドや菖蒲池遊園地など、高度成長期という時代を反映したレジャー空間として出現し、それがまさに現在、変貌を遂げようとしているものがある。このようなレジャー空間の誕生には、



図2 奈良市街を流れる率川（いさかわ）の流路と周辺に分布するため池（2007年末頃の状況）
 青色の破線は暗渠化された流路部分。水色は、埋め立てによって現在は失われてしまった、ため池。
 帯谷(2009) p.107に掲載された図を一部改編。

地域の鉄道の発展や、キーパーソンとなる実業家の存在などが深くかかわってきたが、それは、同時代の日本の他地域で見られた現象と、かなりの共通性を有するとも捉えることができるであろう。近年の変貌の背景や社会的・地域的影響については、なお一層の分析が必要であるが、近現代の景観・環境変化という点からは、留意すべき大きな変化の一つである。また、敗戦直後、米軍占領下の奈良に出現した特殊慰安施設(RAA; Recreation and Amusement Association)と周辺歓楽街、およびそれに関わる社会環境などは、現在では遠い過去として、よほど意識しない限り、一般人にはその痕跡を垣間見ることすら難しくなっている。神社仏閣などとは対照的な、このような改廃の激しい空間の存在は、古くからの歴史的建造物や文化遺産を多数抱える奈良のような土地にあっても、地域の景観・環境を見る視点として、忘れてはならない存在であろう。

(引用文献)

a) Massey, D. et.al ed. (1999) *Human Geography Today*, Polity Press.
 b) Anderson, K. et.al ed. (2003) *Handbook of Cultural Geography*, Sage Press.
 c) Thrift, N. and Whatmore, S. (2004) *Cultural Geography: Critical Concepts in the Social Sciences*, Routledge Press.

d) Cosgrove, D. and Daniels, S. (1988) *The Iconography of Landscape: Essays on the symbolic representation, design and use of past environments*, Cambridge University Press.
 e) 朴恵淑・野中健一(2003)『環境地理学の視座—自然と人間—関係学をめざして』昭和堂。
 f) 松本博之(1989)「環境の認識—生態学的アプローチと人間主義的アプローチ」、大島・浮田・佐々木編『文化地理学』古今書院、pp. 117-145。
 g) 松本博之(1997)「言葉と自然—生態から風景への序説」地理学報(大阪教育大学) 32, pp. 11-23. 松本博之(1997)「潮時の風景—自然と身体」地理学報(大阪教育大学) 32, pp. 24-59。
 h) 松本博之(2003)「先住民の海洋資源利用と国民国家の管理—オーストラリア・トレス海峡諸島民のジュゴン猟を事例として、岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』国立民族学博物館調査報告、46、pp. 299-343。
 i) 松本博之(2004)「<都市的なるもの>の嬖—身体性からの逆照射」、関根康正編『<都市的なるもの>の現在』東京大学出版会、pp. 394-421。
 j) 帯谷博明(2009)「消えた川の記憶—ならまち率川物語」奈良女子大学文学部なら学プロジェクト編『大学的奈良ガイド—こだわりの歩き方』昭和堂、pp. 101-119。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ①松本博之、オーストラリア・トレス海峡の2つの海—先住民族の「場所性」と主流社会の「正当性」、関根康正編『ストリートの人類学』下巻 国立民族学博物館調査報告、81、231-259、2009、査読有
- ②松本博之、第四世界における贈与交換の展開—トレス海峡諸島先住民社会の内旋的適応、岸上伸啓編著『海洋資源の流通と管理の人類学』(みんぱく実践人類学シリーズ3)、明石書店、271-299、2008、査読無
- ③松本博之、女子大生の奈良—外と内の場所のイメージ、奈良女子大学(文学部)なら学プロジェクト編『大学的奈良ガイド—こだわりの歩き方』昭和堂、270-272、2009、査読無
- ④高田将志・相馬秀廣、奈良周辺の景観に見る自然の歴史、奈良女子大学(文学部)なら学プロジェクト編『大学的奈良ガイド—こだわりの歩き方』昭和堂、41-59、2009、査読無
- ⑤内田忠賢、レジャーランドと奈良、奈良女子大学(文学部)なら学プロジェクト編『大学的奈良ガイド—こだわりの歩き方』昭和堂、237-249、2009、査読無
- ⑥吉田容子、敗戦後の奈良、奈良女子大学(文学部)なら学プロジェクト編『大学的奈良ガイド—こだわりの歩き方』昭和堂、253-267、2009、査読無
- ⑦帯谷博明、消えた川の記憶—ならまち率川物語、奈良女子大学(文学部)なら学プロジェクト編『大学的奈良ガイド—こだわりの歩き方』昭和堂、101-119頁、査読無
- ⑧内田忠賢、花の大江戸：その行動文化と都市空間、秋山・金田・高橋・溝口・山田(編)『都市と農地景観(シリーズ アジアの歴史地理 第2巻)』朝倉書店、143-159、2008、査読無
- ⑨内田忠賢、よさこい系イベントがもつ都市祝祭の宿命、都市問題(東京市政調査会)、第99巻1号、73-79、2008、査読有
- ⑩内田忠賢、怪談と場所：不思議の大都市・江戸、國文學：解釈と教材の研究、第52巻11号、56-63、2007、査読無

[学会発表] (計 1 件)

- ①Yoko Yoshida, Spatial politics about Rest and Recuperation Center for occupation army : a case study of ancient capital Nara, Japan. International Sociological Association (ISA) Research Committee on Urban and Regional Development (RC21) Tokyo Conference,

2008年 国際文化会館(東京)

[図書] (計 1 件)

(雑誌論文項目に記載の分担執筆分を多数収録)

奈良女子大学(文学部)なら学プロジェクト編、大学的奈良ガイド—こだわりの歩き方、昭和堂、296頁、2009、査読無

[産業財産権]

○出願状況(計 0 件)

なし

○取得状況(計 0 件)

なし

[その他]

ホームページ

<http://www.nara-wu.ac.jp/bungaku/sges/database/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 博之 (MATSUMOTO HIROYUKI)
奈良女子大学・文学部・教授
研究者番号：70116979

(2) 研究分担者

戸祭 由美夫 (TOMATSURI YUMIO)
奈良女子大学・文学部・教授
研究者番号：60032322
相馬 秀廣 (SOHMA HIDEHIRO)
奈良女子大学・文学部・教授
研究者番号：90196999
内田 忠賢 (UCHIDA TADAYOSHI)
奈良女子大学・大学院人間文化研究科
・教授
研究者番号：00213439
高田 将志 (TAKADA MASASHI)
奈良女子大学・文学部・教授
研究者番号：60273827
吉田 容子 (YOSHIDA YOKO)
奈良女子大学・文学部・准教授
研究者番号：70265198
帯谷 博明 (OBITANI HIROAKI)
奈良女子大学・文学部・准教授
研究者番号：70366946

(3) 連携研究者

なし